

ふうちゃんのうた

あさの 風子
春夏編

目次

春 あるきて うたう

春雨の朝…

五月 神戸にて

朝の情景

六月は四国へ行く

梅雨がきた

夏 苦しき思いをうたう

暑い夏… 10

足をけがする 11

秋 本を読み うたう 15

秋のこえ 17

九月も半ば… 19

深まる秋 21

空の表情 23

春 歩きて うたう

今年の春は、例年になく 雨ばかりでした。
だから、慣れないカップを身に付けて歩いてい
ました。

歩けば 季節の花 生き物 風 雨 音 自然の命
を感じるができます。

それがいつしか歌になり、やがて私の楽しみと
なりました。



春雨の朝――

風や吹き傘で遮る さくら雨

見えるはわれの足元ばかり



ふりしきる 雨に隠れてつくばす雲の

そぞろに春を うたふなりけり

五月 神戸にて――

懐かしき

あめりかのうたぞ 軽やかに

波止場の町に 春風は吹く



朝の情景！

みず色の

空にひとすじひこうき雲

モコと浮かびてゆるやかに行く

すずやかな

風がからだを透りぬけ

我は逸話の

人となりゆく

うつすらとかすかになびく

ひこうき雲

たぶんあしたは雨になる



六月は 四国へ行く！

薄青く けぶる 彼方に 小豆島

喋々 ひらりと 瀬戸内の 海

きらきらと 光り輝く 銀の波

後ろに 流れて 帰りゆく 道



つばくらめ

えさを求めて 飛翔する

空切る姿の 美しきかな

青々と

空の 高さの 清々し

我の心にも

いつの日か 映らん

裏どおり

新しくできた 田舎カフエ

土手から入る

道を知らず



梅雨がきたー

雨の中 帽子姿のお百姓

チヨツキン チヨツキン 葉っぱを落とす



つばめかと思いがた写せども

近くによればくろき鳩なり

今朝もまた

いつもの道を走る人

うしろ姿を

覚えてしまい

登り坂

前を見ないで足もとを



ただただ見つめて 歩をすすめ

思い出と思えば ころろはなごみたり

昨日と今日とで 千里のへだたり

人ならば 我慢をせねばならずとも

とんぼと 為りて 宙を飛ぶなり

夏 苦しき思いを うたう

七月の暑い日、不注意から足を痛めました。

歩くことが 日々の牽引力となつて 過ごしてきた生活を、どうしても 見直さなければならなくなつたのです。

痛さで 思うように動けず、心は焦り、縮こまつて 歌も浮かばぬ日々が続きました。

歩けぬということは、これほどまで、人間から自信を奪うものとは知りませんでした。

そんな折、これではダメだと 無理を承知で映画館まで運転。スクリーン上のカッコいいアクションに力づけられ、些細なことで 弱気になつていのが 馬鹿らしくなつて……

おかげで、いい考えも 浮かんできました。

歩かなくても 出来るじゃないの。

世界が少し明るさを取り戻しました。

閉ざされた環境の中では、また、他の方法で
違う楽ししみも見いだせるということを知りまし
た。

歌も浮かんできて…



暑い夏！

今朝の道

カラスが嗤い犬が吠え

鳥が飛び立つ嵐の予感



太陽をさえぎる雲に背を向けて

彼方に望む透明な空

草むらに

のぼる煙のモクモクと

空に馴染んで

かすみ雲

足をけがする！

原点

からだにきずを負ったなら
3分の速度で ゆっくりすすむ
多少のいたみは がまんして
じぶんの 歩める 原点をしる



他人ごと

自分ごとにした一週間
終わってみれば

無しと変わらず

歩く道いつもの夫婦が野良しごと

静かに働くけんかをしたな

日曜日

尺八を吹く人のいる

神社の角を

曲がりて行く

雲

くもよ くもよ
どこに ながれていくんだい
そらにすがたを さがすじゃないか
おまえがいるから あのそらは
たしかなものに みえるのに

くもよ くもよ
なにを さがしにいくんだい
そらは あおくなつたじゃないか
おまえのいない あのそらは
どこからみても おなじにみえる

そらよ そらよ
むかしと かわらぬ そらなのかい



ふうちゃんのうた集

著 者：あさの 風子

初 版：2015年10月22日

第2版：2015年11月30日



発 行：みつわばそこん教室

＝お願い＝

この製品の転載、転売 は禁止されています